

# OCHADAI GAZETTE

お茶の水女子大学学报 第218号 2008年11月8日

OCHADAI GAZETTE Autumn, 2008



## 魅せる！ お茶大の力

郷通子学長が学会賞を受賞、芥川賞受賞者インタビュー

### CONTENTS

#### TOPICS

郷通子学長が第8回日本進化学会賞／  
木村資生記念学術賞を受賞…………… 1  
楊逸さんが第139回芥川賞を受賞…………… 3  
お茶の水女子大学へのご支援…………… 5  
「木戸孝允肖像画」受贈記念講演会を開催  
お茶の水女子大学へ茶室の寄贈

学生のアクティビティ…………… 7  
学生サークル Ochas 活動紹介  
「D-cha」が学内新聞を企画  
第2回女子中高生のためのサイエンスフェスティバル  
お茶大生による情報発信「キャンパス・ナウ」  
キャンパス点描…………… 9  
国際シンポジウム「21世紀に生きる女子大学」  
若手と女性が活躍するお茶大型システム  
2008オープンキャンパス



お茶の水女子大学  
Ochanomizu University

# 郷通子学長が第8回日本進化学会賞／木村資生記念学術賞を受賞

2008年8月、郷通子学長が、日本進化学会において「第8回日本進化学会賞／木村資生記念学術賞(木村賞)」を受賞されました。受賞の対象となったのは、「タンパク質の立体構造と遺伝子の構造の進化的起源に関する研究」\*です。これを機に、女性研究者としての志、本学の学生たちに寄せる思いなど、お話をうかがいました。



**Mitiko Go**

郷 通子

**このたびは、  
受賞おめでとうございます。**

どうもありがとうございます。木村資生先生は、もうお亡くなりになりましたが、進化の分野における世界的な研究者で、ダーウィニズムに対する、まったく考え方の違うスケールの大きな説を出された方です。非常に尊敬する先生を記念した賞をいただき、とてもありがたく、感謝しています。

**先生のご研究は、  
どのようなものなのですか？**

私はもともと物理学の出身なのですが、木村先生のご研究に大きな影響を受けて、進化の問題に関心をもち、分子進化学という新しい学問にとりくむことになりました。DNAやタンパク質といった生体中のものについて、あるときは物理化学の法則

に従うものとして、またあるときは生き物らしさを象徴するものとして、物理学と生物学の二つの視点から解明しようとしています。

今回賞をいただいた研究も、1981年に書いた論文が出発点なのですが、これがその後20年以上にわたって学界の論争を呼ぶことになったんですね。多くの人が、私の提出した理論が正しいとか正しくないとか、いろいろ議論してくださったわけ。あれこれ実験したり、論証したりしてね。私はそれをかたわらに見ながら、自分が提案した概念について、もっと理論を先鋭化させることに時間を使ったのです(笑)。

**日々更新というイメージのある科学の分野で、20年間、先生のご研究をこえるものが出てこないというのは、すごいことですね。**

そうですね、考えてみると20数年も経っているわけですけど、もともと、物理出身でしょう？物理や化学、数学というのは体系ができていて、体系ができていてからこそ美しい。一方、生物学というのは、たとえば進化について考えても、一つの生き物が出てきた、というのは紛れもない事実だけど、そのプロセスは一つ一つ違う。遺伝子とかタンパク質とか、異なる生物ではアミノ酸配列が違っても、ヘモグロビンの機能は同じ。これが、物理や化学の世界から見ると不思議に感じられたんですね。遊びがあるけど、機能している。これはほんとおもしろくて、私、大好きなんです。

進化っていうのは、事実として存在しているけれど、実験はできないものなんです。そうでしょう？過去を説明することはできるけれど、未



来を予測することは難しい。だから、まずその礎となる枠組みとか概念、理論を求めたいと思ったんです。生物がおもしろいのは、すごくいいかげんなところと、同時に、一体誰が管理してるんだろうと言いたいぐらい、全体として見事なシステムがあるところ。このシステムを明らかにしたい、というのが出発点ですね。

### お茶の水女子大学に進まれたのは？

子どもの頃から、数学が大好きでした。すごくできたというわけじゃないのよ、とにかく好きだった。あと、いろんなことを疑ってみることが多かったですね。皆がそうだとおっしゃっているのを、ひそかに、ほんとにそうかな、と思っていました。好奇心は旺盛でしたね。本を読むのも好きで、少女小説なんかよく読んだんですよ。『若草物語』はやっぱリジョーよね、って(笑)。

高校生のころ、ソ連の人工衛星の打ち上げがあって、当時、「スプートニクショック」と呼ばれたんですが、私も影響を受けて、数学から物理に関心を移したのです。でも、当時はまだ、女の子が大学に行くなんて、という風潮が強かったし、また私の母はどちらかといえば昔気質の人で、あまり賛成してはくれなかったのですが、お茶の水女子大学は女子高等師範学校だったから将来教師になれるでしょう、お母さんが習った先生もここを出た先生だったんでしょ、と説得したの。早くに父を亡くして、妹と私を女手一つで育ててくれた母を安心させたい、という思いも強かったんです。

当時の物理学科は12人で、ここでお互い切磋琢磨しながらみっちり学べたことは、ほんとうに大きかったですね。学部時代をお茶大で過ごしたことは、その後の私の研究者としての人生にとって、何よりよかったと思います。そのあと、大学院は名古屋大学に進みました。

### ライフコースをどんなふうに設計されたんですか？

博士後期課程にいるときから、アメリカ留学の計画をたてていました。当時の日本ではポスドクの職がなかったし、女性に与えられるポジションはもつとなかった。ちなみに、お茶大では女性の助手がおられたんですよ。びっくりしちゃった。でも一般的には女性の職はなかったし、なにより、研究者になるためにはドクターをとるだけではだめだと思っていました。それで、3年ぐらい、海外で武者修行をしようと思ったのです。アメリカで自分の力を試したかったんですね。3年間かけて、自分がどの位置にいるのか、他の人が持っていないどんなものを持っているのかを見極めようと思いました。で、後期課程在学中に結婚して、車の免許をとって、そして博士論文を書きながら英会話を学びました(笑)。

渡米してからは、研究と子育ての両立に大わらわ。でも、利用できるものは全部利用して、がんばりましたよ。私、子どもも大好きなんだけど、研究も大好きなの(笑)。だから、研究の時間を作るために、合理化できることは合理化したし - たとえば、アメリカは冷蔵庫が大きくてフリーザーがあるから、全部冷凍しちゃおうの(笑) -、手伝ってもらえる人には手伝ってもらいました。

アメリカから帰ったときは、案の定(笑)職はなかったんですが、夫が九州大学に赴任することが決まっていたので、私も一緒に行きました。ここから10年間はがんばるぞ、と決意していました。子育て中は実験

はなかなかできなかったんですが、もともと理論研究が中心でしたから。70年代は、家事と子育ての合間に、自宅から電話で音響カプラを利用して大学の大型コンピュータに接続し、研究を続けました。

今もそうですけど、ほんとうに研究が大好き。この思いがいちばん大切ですね。

### お茶の水女子大学論で授業を担当されていますね。

学長になると、授業を通じて学生さんたちとふれあう機会が少なくなりましたが、とても残念です。教師は一方向的に教えるスタンスにあるように思われるかもしれませんが、違うんですよ。学び始めたばかりの人や、専門家ではない人からの素朴な質問が、実はとてもおもしろいし、いろんなことに気づかせてくれるものなのです。ですから、教師は教えると同時に、自分も学んでいるんですね。

とくに、お茶大だと、教師になる人も多いでしょう？自分が教壇に立ち、話したことを、学生たちが吸収して考えて、そして彼らがまた教壇に立ち、次の人たちに伝える。いま、お茶大に通っている学生さんのなかにも、高校のときの先生がお茶大出身だったから、という人も多いです。こういう絆というか、受け渡しというのはとてもすばらしいし、すてきなことだと思います。

(聞き手・菅聡子)



\*第8回日本進化学会賞／  
木村資生記念学術賞(木村賞)  
<http://www.ocha.ac.jp/topics/h200826.html>

郷通子学長が第8回日本進化学会賞／  
木村資生記念学術賞を受賞

## 楊逸さんが第 139 回芥川賞を受賞

受賞作「時が滲む朝」 中国人女性作家としては史上初



本学出身の楊逸さんが、第139回芥川賞を受賞しました。楊さんは、中国黒龍江省ハルビン出身。1987年、大学4年生のときに来日、働きながら日本語学校に通って日本語を勉強し、本学文教育学部地理学科（当時）に入学しました。来日してからは、日本語の小説を読みあさり、1995年に本学を卒業、その後は中国語新聞の記者や中国語の講師として勤めるかたわら、多くのエッセイや詩、小説を執筆。日本語で書いた『ワンちゃん』（初出『文學界』2007年12月号、のち文藝春秋刊）で第105回文學界新人賞を受賞、芥川賞候補となりましたが惜しくも落選。今回、2度目のノミネートで受賞となりました。中国人女性作家としては史上初の受賞です。

受賞作『時が滲む朝』（初出『文學界』2008年6月号、のち文藝春秋刊）は、天安門事件をモチーフに、中国における青春群像を描いたもの。8月22日、東京會館での授賞式では、1300人の参会者を前に、「受賞を機に日本にとけこんだよう」と喜びを語られました。



授賞式に先立ち、本学主催の国際シンポジウム「21世紀に生きる女子大学」（7月19日開催）に際して、楊さんから母校にメッセージが送られました。（以下は、本学理事・副学長内田伸子教授によるインタビューの抄録）

**Q：本学で学ばれたことについて、どのような感想をお持ちですか？**

A：当時、中国はとても貧しく、素晴らしい勢いで発展を遂げている日本に憧れを抱いておりました。それで、大好きな日本、それもお茶の水女子大学への留学のチャンスが巡ってきたとき、迷わず、中国の大学を中退し、お茶の水女子大学に留学いたしました。

留学はしましたが、生活が苦しく、アルバイトと学業の両立にとっても苦労しましたが、若さで乗り切りました。

地理学を4年間専攻できたおかげで、グローバル世界で生きる意味を見つけることができました。お茶の水女子大学の教授陣は高いレベルの研究者であり、少人数で懇切丁寧なご指導を受けることができました。

21名のこぢんまりとしたクラスでは、優秀な級友たちと学びを共にでき、とても楽しかったです。最初は日本語で苦労し、ゼミでもわからないことがたくさんありましたが、日本語チューターのサポートを得て、だんだん内容がわかってきました。

地理学科では、1年生で1泊2日、2年生で2泊3日、3年生で3泊4日のフィールドワークがありました。四国の百川（ももご）村、山形県の米沢市農村部、横浜市のみなとみらいの開発中のプロジェクトの調査をしました。普通の外国人では接することのできないような農村部や開発中のプロジェクトを調査できたのは幸運でしたし、日本の発展の歴史や日本文化の奥深いところに触れ、日本を知ることができたという実感をえたことは、その後の私の人生においてかけがえのない財産となりました。本当に感謝しております。

**Q：女子大学の意義について、どのようにお考えですか？**

A：私の学生時代にも、お茶の水女子大学が統廃合されるとか、共学大学になるという噂が学生たちの間で囁かれており、とても心配しておりました。日本やアジアの国々（中国にはありませんが）で女子大学があるのには理由があると思います。芥川賞や直木賞の受賞者は、昨年も今年も女性で、女性が元気になってきたと言われていています。しかし、政界や学術の世界では、まだまだ女性の進出が欧米諸国に比べて少ないのではないかと思います。女子大学という環境で、男性社会に男性と伍して戦えるエネルギーと実力をしっかり身につける必要がある段階にあります。だからこそ女子大学は存在しているのです。歴史と伝統のある母校には、ぜひともその先頭に立ち、世の中を変えていただきたいと願っています。

**Q：留学生のみなさんへのメッセージをお願いします。**

A：留学生にとっては、異文化に暮らすということでのいろいろな試練があると思いますが、とても辛いこともたくさんあった私がここまでこれたのですから、元気で頑張ってほしいと思います。若いときの苦労は将来の糧になります。苦労を将来の糧にするよう、心より願っております。

## 楊逸さんが第139回芥川賞を受賞

# お茶の水女子大学へのご支援 「木戸孝允肖像画」 受贈記念講演会を開催

このたび、お茶の水女子大学に「木戸孝允肖像画」の寄贈があり、これを記念して9月30日に大学講堂（徽音堂）で講演会が開催されました。

木戸孝允公(1833-1877)は、文部卿としてお茶の水女子大学の前身である東京女子師範学校の設定(明治8年11月)の布達をした人物です。寄贈された「木戸孝允肖像画」は、1878年(明治11年)にイタリア人画家レオポルド・ヴィターリによって描かれ、吉備国際大学文化財総合研究センターにおいて約2年間をかけて科学調査と修復が行われた後、本学へ寄贈されました。



講演会には100名を越える参加者があり、郷学長の挨拶の後、木戸孝允公の曾孫にあたる和田昭允お茶の水女子大学理事(東京大学名誉教授)から「木戸孝允肖像画の発見」、奥田環(お茶の水女子大学アカデミック・アシスタント)による「木戸孝允と東京女子師範学校」の講演が行われました。さらに、科学調査と修復にあたられた吉備国際大学の下山進教授(文化財総合研究センター長)と大原秀行教授(文化財学部長)による「木戸孝

允肖像画の科学調査と修復」と題した講演が行われ、修復にまつわる興味深いお話をうかがうことができました。

講演会開催後の10月1日から3日間、肖像画とお茶の水女子大学の歴史的資料がお茶の水女子大学歴史資料館にて一般公開され、来館者は3日間で170名を超えました。





この度、お茶の水女子大学に茶室のご寄贈がありました。

この茶室は、故伊東眞・美知子（宗美）様ご夫妻の遺族伊東哲様、吉田啓子（宗風）様、杉山幸子様のご両親の名前でお茶の水女子大学に寄贈されたものです。

伊東宗美先生は、50年以上にわたり裏千家茶道の普及に努められ、平成11年4月より平成18年12月まで本学裏千家茶道部の指導、育成にもご尽力されました。そのような茶道の普及と振興にかけられた先生の意志を受け継ぐべく、本茶室が寄贈されました。

庵号「芳香庵」は、お茶の水女子大学が伝統ある女子教育の場であること、また、以前この地に梅の木が植えられていたことに因み、この茶室から女性としての教養・知性の香りが社会へ広がるように、との願いをこめて、利休居士第15代 鵬雲斎 千玄室大宗匠が命名され、あわせて扁額も賜りました。



# 学生のアクティビティ

## 学生サークル Ochas 活動紹介

Ochas (オチャス) は、食と栄養に関する活動を行っている学生サークルです。最近の活動をご紹介します。



### 内閣府食育推進評価専門委員会で活動報告

内閣府からの要請で、9月30日に開催された第4回食育推進評価専門委員会で活動報告を行いました。食育推進評価専門委員会は、食育の実施を推進するとともに、食育の推進状況の評価を行うため、平成18年に内閣府に設置された委員会です。

今回の専門委員会では、食育に係る先進事例3件が報告されました。Ochasは大学生の自主的な活動として選ばれ、これまでの学外・学内の食育活動について報告しました。大学サークルとして食育活動を行っている団体は、全国でもめずらしく、委員の先生方にも興味を持っていただきました。



発表後の質問に答える Ochas 代表谷口絵里香(右)と副代表土屋あまね(左)(食物栄養学科3年)

### 食育シンポジウムで活動を発表

10月13日に本学で行われた、文部科学省特別教育研究経費「子どもの発達・成長過程を見通した食育の実践と教育プログラムの構築」による食育シンポジウムで、Ochasの活動発表を行いました。

附属いずみナースリーでのおやつ作り・おやつレシピ集の発行、食育イベントでの企画、世界の食の問題についてなど、実際に活動しているメンバーが来場者の方の対応にあたり、直接ご説明させて頂きました。たくさんの方から、「(おやつレシピ集に対し)これは学生さんが作ったの?すごいわね」、「(食育イベント用に制作した紙芝居に対し)もらいたいくらいよくできているわ」などのお言葉をいただきました。また、世界の食の問題に対しては、「確かに考えなければいけない深刻な問題ですね」と、共感いただきました。来場者の中には、ぜひ参考にしたいと熱心にメモをとってくださる方もいらっしゃり、Ochasの活動の励みになりました。



食育シンポジウムの来場者の方に、活動を説明する Ochas メンバー



Ochas が制作したおやつレシピ集



### Ochas 企画のお茶とお土産の販売

このたび、お茶の水女子大学後援会の支援を受け、Ochasがお茶の水女子大学のお土産を企画・開発しました。抹茶味・甘納豆入り「お茶とお豆のパウンドケーキ」の微音祭(11月8・9日)で販売します。このパウンドケーキのレシピ開発から、製造委託業者との交渉、契約等、すべてOchasが行いました。「チョコちゃんのスープ屋さん」で販売していますので、ぜひ、お越しください。



試作のパウンドケーキを調理する Ochas メンバー



Ochas が企画、販売する「お茶とお豆のパウンドケーキ」



## 「D-cha」が学内新聞を企画

「D-cha」(ディーチャ)とは、特別教育研究経費「女性リーダー育成プログラム」(2006年～)の授業を履修した学部生により、2007年度に発足した学生自主企画プロジェクトのことで、大学公認の学生組織として、学生自らが企画立案した講演会やイベントの運営、広報誌の発行等、様々な活動を実施してきましたが、この度、学内向けの情報誌として「お茶娘タイムズ(おちゃこタイムズ)」を企画しました。

今後も「お茶娘タイムズ」を通じて、身近だけれども意外と知らないお茶の水女子大学のいろいろな情報を魅力的に紹介していくことを予定しています。大学食堂や附属図書館、広報チームなどで配布しておりますので、ぜひご覧ください。

学生企画プロジェクト「D-cha」

<http://www.ocha.ac.jp/campuslife/d-cha/index.html>

お茶娘タイムズ

# 学内新聞誕生！

---

**名物お茶大生発掘！** ~File:1~  
**こんなお茶大生見つけちゃいました。**



生活科学部食物栄養学科3年 谷口絵里香さん

「お茶大生」って、何を指しているの？と聞かれました。お茶大生は、お茶の水女子大学の学生のことです。お茶大生は、お茶の水女子大学の学生のことです。お茶大生は、お茶の水女子大学の学生のことです。



「食」を総合プロデュース！：谷口絵里香さん

お茶大生は、お茶の水女子大学の学生のことです。お茶大生は、お茶の水女子大学の学生のことです。お茶大生は、お茶の水女子大学の学生のことです。

＜創刊号＞  
 10月06日  
 (月曜日)  
 お茶の水女子大学  
 学生生活プロジェクト  
 D-cha  
 <お問い合わせ先>  
 D-cha  
 D-cha@ocha.ac.jp

## 第2回 女子中高生のためのサイエンスフェスティバル 「ときめき★サイエンス」を開催



卒業生によるパネル・ディスカッション、そして、在学中の大学生、大学院生によるパネル・ディスカッションでは、会場からの質問に答える形で、活発なやりとりが繰り広げられました。

会場アンケートには、「将来の夢を決めることの後押しになった」、「進路のことで悩んでいたのが、参考になった」、「女子大の良さなどがわかった」等といった満足度の高い感想が寄せられました。

## お茶大生による情報発信「キャンパス・ナウ」を始めます

お茶の水女子大学では、「入学後にどのような学生生活を送れるのかについて知りたい」という中学生や高校生の方々の声にお応えして、情報発信のためのコンテンツ、「キャンパス・ナウ」をホームページ上に開設いたします。

「キャンパス・ナウ」では、お茶大生が送る日々のキャンパスライフをお茶大生自身がいろいろな角度から紹介し、キャンパスライフの魅力をお伝えしていきます。お茶大を目指す方にとって、なかなか知ることができなかった情報に出会えるかもしれません。

また、お茶大の楽しさを伝えるだけではなく、お茶大生にとって身近な情報発信のソースとしても活用していきますので、興味のあるお茶大生は広報チーム(大学本館1階117室)までお訪ねください。

## 学生のアクティビティ

## 「若手と女性が活躍するお茶大型システム ～新たな拠点と9人の自立的研究者～」を開催

本学の新しい研究拠点「生命情報学教育研究センター」および「お茶大アカデミック・プロダクション」を広く知っていただくため、9月26日、一橋記念講堂にて公開シンポジウム「若手と女性が活躍するお茶大型システム～新たな拠点と9人の自立的研究者～」を開催いたしました。

「お茶大アカデミック・プロダクション」とは、役員直属の人材育成組織であり、国際公募によって世界的に活躍する若手研究者を募り、自立した環境で研究することによって、新たに研究領域をリードする人材の育成を目指して設立されました。このプログラムによって採用した特任助教には、研究力だけでなく、教育する力、そしてマネジメントする力を備え、常に挑戦することが期待されています。20倍を超える応募者の中から9名の特任助教が採用され、このうち4名が女性です。

特任助教による講演会では、生命情報学の観点から眼の進化などの実験を基礎とした研究や、計算機を使いながら原子・分子などの研究を行うシミュレーション科学など、様々な分野における先端的な研究が紹介されました。

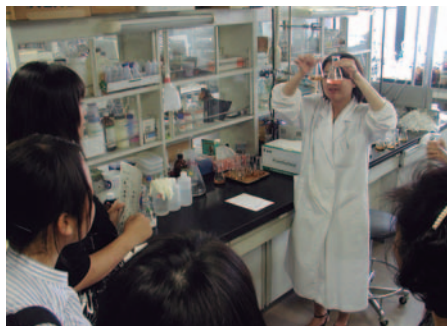
研究発表会終了後に行われた特任助教の方々によるパネルディスカッションでは、他分野の人と接する機会が増え、新しい領域への展開が考えられるようになったなどのコメントもあり、今後の更なる活躍に期待が寄せられました。



## 2008 オープンキャンパスを開催

7月20日、21日に2008オープンキャンパス(大学見学会)を開催いたしました。20日は、生活科学部・理学部の見学会に約2,300名、21日には、文教育学部の見学会に約1,950名(2日間で約4,250名)の参加者がありました。

各学部の教員や在学生によるカリキュラム説明会や模擬講義、研究室訪問などがおこなわれるとともに、相談ブースでは入試制度や大学生活などに関する個別相談も行われ、高校生だけでなくそのご家族の方々にも、お茶の水女子大学の魅力を肌で感じていただくことができました。



## キャンパス点描



お茶の水女子大学学报 第218号

▽発行日：2008年11月8日

▽発行：国立大学法人お茶の水女子大学

東京都文京区大塚2-1-1 (〒112-8610)

ご意見・ご感想はこちらまで

学術・情報機構広報チーム

電話 03-5978-5105

FAX 03-5978-5545

E-mail : [info@cc.ocha.ac.jp](mailto:info@cc.ocha.ac.jp)

URL : <http://www.ocha.ac.jp/>